

ボグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向
－バボージャヴを例として

The Response of Eastern Inner Mongolians to the
Establishment of Bogd Khan Government
— The Case of Babujab

烏 蘭 塔 娜

ボグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向 —バボージャヴを例として

The Response of Eastern Inner Mongolians to the Establishment of Bogd Khan Government — The Case of Babujab

烏蘭塔娜 (Ulantana)*

キーワード：バボージャヴ、内モンゴル、ボグド・ハーン政権、トゥメド左翼旗

Keywords : Babujab, Inner Mongolia, Bogd Khan Government, Left Wing Banner of Tumed

問題の所在

1911年12月、外モンゴルの活仏ジェヴツンダムバ・ホトクト、ハルハ王公や内モンゴルの官吏ハイサンらは、フレー（現在のウラーンバートル、ボグド・ハーン政権の首都）駐箚の辦事大臣三多を追放し、独立を宣言してボグド・ハーン政権を樹立した。この独立運動は外モンゴルに留まらず、内モンゴルなど、清朝支配下のモンゴル人を統合した「大モンゴル国」の樹立を目的としており、内モンゴル諸盟旗にも独立モンゴル国への合流を呼びかける檄文が送られた。

ボグド・ハーン政権からの合流の呼びかけに対して、内モンゴル諸盟旗の反応は様々だった。当時内モンゴル49旗中の35旗が帰順の呼びかけに応じたというが(注1)[マグサルジャヴ 1925-1927:36]、多くは中華民国との間で去就をあいまいにしたまま観望したのである。その中で最も早く外モンゴルの独立運動に呼応したのが内モンゴルのジリム盟のトクトフ、ジョソト盟のハイサンであり、ジリム盟右翼前旗ジャサグ・ウタイとジリム盟右翼後旗ジャサグ・ラシミンジュールは武装蜂起を起こしている。さらにジョーオダ盟の開魯県でも蜂起が起きている。

本論文で取り上げるボグド・ハーン政府期の独立運動に関わって、従来必ず言及される人物にバボージャヴ (Babujab、巴布扎布) がいる (注2)。バボージャヴに関しては以下の中見立夫氏[Nakami1999]、盧明輝氏[盧明輝1979]、ロンジド氏[З.Лонжид 2002]、ジャムサラン氏[Л.Жамсран 1996]らの研究論文がある。

バボージャヴがほかの上記の内モンゴルの人々と異なるのは、彼が早くから日本と深い関係を持ち、その大陸政策に深く関わった点である。それゆえ日本側においても彼は古くからよく

* 東北大学環境科学研究科博士後期課程

知られた人物であった。バボージャヴは1904年日露戦争の時に日本側の満洲義軍に召募されて、日本側に協力をしていたのである。日露戦争後は、「其生まれ故郷たる彰武縣の巡警局長に任用せられ…」[黒龍會1966:中,626]た。彼の「生まれ故郷」とされる彰武県とは、清代内務府の牧廠であった養息牧廠、すなわちスレグ旗に1903年に設置された県である。バボージャヴはトゥメド左翼旗の出身であったが、10歳の頃にスレグ旗に移住したのである。後彰武県は、新民府に属し、奉天省の管轄下に置かれた。彰武県で巡警局長職を務めていた時期のバボージャヴに関する情報はまだ見つかっていないが、その後、再びその名が史料に現れるのは、1912年の8月頃のことである。

1911年末にボグド・ハーン政権が樹立され、内モンゴルを含むモンゴル各地に合流を呼びかけると、彰武県で巡警局長を務めていたバボージャヴは、これに加わるために、翌年8月ごろに部下と家族を連れて彰武県から逃げ出し、フレーに赴いて、政権から鎮国公に封じられたとされる。

本論文では、バボージャヴが最初にフレーに赴いた経緯に着目してみたい。それは以下のような疑問による。

上述のように、1912年のボグド・ハーン政府成立時、バボージャヴは奉天省管轄下の彰武県巡警局長という地位にあった。従来の理解ではバボージャヴは彰武県から「逃亡」し、直接フレーに赴いたことになっており、自旗のジャサグや王公の紹介を得たような事実も知られていない。そのバボージャヴが、外モンゴルの独立に加わるために、突如彰武県から逃げ出し、フレーに赴いただけで、直ちに歓迎を受けて鎮国公の爵位まで与えられるという破格の待遇を受けるとするのは非常に不可解に思われる。彼が馬賊の頭目として、また満洲義軍における日本への協力者として日本側に知られていたのは事実としても、彼自身はトゥメド左翼旗の一旗民に過ぎない。彼はハイサンのような旗官員でもなく、またトクトフのような反漢蜂起の領袖であったわけでもないのである。

また、ボグド・ハーン政権は、内モンゴル各旗のジャサグ宛に檄文を出したが、盟旗の行政組織に属したわけではない奉天省管轄下の彰武県巡警局長にも檄文が届けられたとは考えにくい。つまり、政権とバボージャヴの間の接点が見えないのである。

このように、彰武県巡警局長バボージャヴのボグド・ハーン政権との接点や、そのフレー行の経緯は不明瞭であるため、本論文ではこの問題を中心として考察する。それは、バボージャヴがフレーに至るまでの経緯が、その後の彼の独立運動における一連の活動の基礎ともなるからである。

本論文では、日本外交文書及びモンゴルの文書史料を用いて、従来の知見を踏まえつつ、バボージャヴのフレー行の経緯を明らかにすることを通じて、ボグド・ハーン政権成立時の内モンゴル人の動向の一端を明らかにしたい。

1. バボージャヴの活動について

バボージャヴは1875年生まれの内モンゴル・ジョソト盟トゥメド左翼旗（モンゴルジン旗、今の中国遼寧省阜新市）の人である。同旗の人口はトゥメド右翼旗とともに外藩モンゴルの中でもっとも多く、柳条辺牆を挟んで、遼寧省の黒山県と接している [ボルジギン・ブレンサイ ン 2007 : 330]。10歳頃に彰武県に移住して、その後、早くも日本側に知られ、日露戦争の時に日本の満洲義軍に参加して、日本に協力した。戦後は、日本側の斡旋で、彰武県の巡警局長に任命された。1911年末にボグド・ハーン政権が樹立され、内モンゴルを含むモンゴル各地に合流を呼びかけた。彰武県で巡警局長を務めていたバボージャヴは、これに加わるために、1912年8月ごろに部下と家族を連れて彰武県から逃げ出し、フレーに赴いて、政権から鎮国公に封じられたとされている。

1912年11月の露蒙協約締結により、ロシアの援助を得たボグド・ハーン政権は内モンゴル統合の具体的計画を実行に移し、1913年の1月から、内モンゴルの五つの方面に軍隊を派遣した。バボージャヴは東南方面の指揮官に任命され、民国軍と戦った功績により、東南辺境モンゴル人鎮撫官兵総管大臣ショドルゴ・バートル世襲鎮国公(jegün emün-e kijayar-un mongyulčud-i tübsidken toquniyulqu tüsimel čerig-i yerüngkeyilen jakirqu sayid siduryu bayatur üy-e ularin jalıyamjilaqu ulus-un tüsiy-e güng)に封じられた。

しかし、1913年10月の中露宣言により撤退を求めるロシア側の圧力と武器の窮乏から、政権は軍隊を引き揚げざるを得なくなり、モンゴル問題はキャフタでの三国会談で解決されることになった。しかし、バボージャヴは自軍を引き揚げることなくハルハと内モンゴルの境界地方に留まり、キャフタ三国会談のなりゆきを見守っていた。会議の結果内外モンゴルの統合が否定されると、バボージャヴは日本から協力を得るために、日本へ部下を派遣した。これに直接協力したのが日本の大陸浪人川島浪速である。その目的はバボージャヴの擁する二千名以上の兵士を利用して、満蒙独立計画を実行することであったが、1916年6月に袁世凱が急死し、その計画は宙に浮いた。しかし、その時バボージャヴ軍は既に居在地ハルハより奉天に向かって進行中だった。郭家店に到着した時に日本側に撤退を命じられ、撤退途中林西県で民国軍に攻撃され、戦闘中に撃たれて戦死した。

バボージャヴの活動について、モンゴル側では1913年のボグド・ハーン政権の南進軍参加、日本側では満蒙独立運動時の行動が注目され、研究されてきた。

バボージャヴの事績に関する研究は、従来、柏原孝久、濱田純一『蒙古地誌』（1919）、黒龍會『東亜先覺志士紀傳』（1966）、日本外交文書などの日本側の史料や、陳籙の『止室筆記』（1968）、盧明輝『巴布扎布史料選編』（1979年）、とくにこれに収められたバボージャヴの三男ジョンジュールジャヴ（正珠爾扎布）の回想録「巴布扎布事略」などの中国側の史料によっていたが、近年ではモンゴル国立中央アルヒーフ所蔵のバボージャヴ関連文書が利用されはじめ

ている。

モンゴル国立中央アルヒーフ Монгол Улсын Үндэсний Төв Архив (略語МУУТА) は17世紀から20世紀までの文書史料を所蔵しているモンゴルの代表的史料館で、1990年代に公開され、所蔵史料を閲覧することができるようになったため、それを利用した研究論文もいくつか発表されている。また、同アルヒーフ所蔵の史料集が同国からいくつか出版されている (注3)。これにより、これまで日本・欧州・中国のものに限られていたボグド・ハーン政府時代のモンゴルに関する史料状況が改善され、研究の視野が一層広がった。勿論、ボグド・ハーン政権と深い関係を持っていたバボージャヴ関係の文書も数多く保存されている。

一方、日本では、2001年に開設されたアジア歴史資料センター (注4) ホームページにバボージャヴを含むモンゴル関係の史料も数多く収録されている。今回利用する史料は、日本外交文書、主に、当時日本外務省及び日本軍が現地に情報員を派遣して収集してきた間接情報及び、モンゴル国立中央アルヒーフ所蔵の本人による呈文である。

2. バボージャヴのフレー行に関する従来の知見

従来のバボージャヴのフレー行の経緯の理解は、ジョンジュールジャヴの回想によるところが大きい。ジョンジュールジャヴはバボージャヴの三男で、父親のフレー行に参加した当事者である。彼は1916年の父の死後、日本の陸軍士官学校に学び、満洲事変に際しては、モンゴル独立軍の創設と蜂起に中心的役割を果たし、満洲国建国後は満軍の將軍となった。戦後はソ連軍に捕虜として抑留され、中国への送還後、1963年に釈放された。この回想「巴布扎布事略」は釈放後に書かれたものである。しかし、当事者と言ってもジョンジュールジャヴは当時7歳だったため、その内容の信憑性には疑問が残るのであるが、従来バボージャヴのフレー行の経緯を明らかにする史料が他に存在しなかったのである。

この回想録を最初に紹介したのは盧明輝氏で、1979年に彼が編集した『巴布扎布史料選編』[盧明輝 1979:17-23]に収録された。後1984年に『内蒙古文史資料』[ジョンジュールジャヴ 1984:184-188]第14輯にも再録されている。中見氏、ロンジド氏も盧明輝氏の論文を引用している。この回想録によると、バボージャヴのフレー行の経緯は以下のようなものであった。

…1913年のある日の深夜、バボージャヴは3、40名の部下及び妻子を連れ、大冷営子(彰武県の北60里)より逃げ出して、モンゴル独立に参加するために、大庫倫(今のウランバートル)に向かった。私(ジョンジュールジャヴ)はその時七歳だったので、家から出たときの状況は頭にぼんやり残っている、その夜、家族全員が突然七匹の馬に引かせる馬車に乗って、布団を被って、大門を出た。村には犬の吠える声があった。そして前にも後にも騎馬の人が護衛していた。その夜は、霧が非常に濃かった。走り出してもなくある人が「軍隊が追いかけてきた」と言ったので、私(ジョンジュール

ルジャヴ)はすごく怖がった。どのぐらいの道をどれだけ遠くまで走ったか分からない。ようやく金龍鎮(その後経過したところは、はっきり覚えていない)に到着し、何日間か留まって、その後に西北に向かい、ナイマン旗、ジャロード旗、アルホルチン旗、東西ウジュムチン旗、アヴガ旗、ホチト旗などを通過し、家族をホチト旗に留めて、バボージャヴは軍隊を連れて、大庫倫に赴いた。途中漢人の軍と何回か戦ったが、一番激しかったのは、エグゼル廟の戦いであった。

大冷営子より出発した後、途中モンゴル人がバボージャヴが大庫倫へ赴き、モンゴル独立に参加すると聞いて、多くの人が先を争ってついて来て、庫倫に到着した時には二千人以上に達していた。

バボージャヴは、ジェヴツンダンバホトクト及びその大臣らの歓迎と歓待を受け、当時の大庫倫政府から鎮東將軍、鎮国公等の爵位を与えられた。大庫倫に一年以上住んだ後、部隊をつれてハルハ河沿岸に二年あまり駐屯し、軍隊の訓練及び整頓をしていた…

この回想からは、バボージャヴのフレー行について以下のような理解が得られる。第一に、バボージャヴは、1913年のある深夜、夜陰にまぎれて彰武県から「逃げ出した」こと。第二に、逃亡は「モンゴル独立に参加するために、大庫倫(今のウラーンバートル)に向かった」ものであること。第三に、途中金龍鎮、ナイマン旗、ジャロード旗、アルホルチン旗、東西ウジュムチン旗、アヴガ旗、ホチト旗を経由し、家族をホチト旗に留めて、バボージャヴは軍隊をつれて、大庫倫に赴いた…途中漢人の軍と何回か戦ってフレー到着時には2千人の軍を率いていたこと。第四に、到着後バボージャヴはボグド・ハーン政府から「歓迎と歓待」を受け、「鎮東將軍、鎮国公等の爵位を与えられた」ことである。

この記述で疑わしいのは、1913年という逃亡の時期である。この年バボージャヴはボグド・ハーン政権の南進軍に参加し、すでに内モンゴルで戦っている。従って彰武県からフレーに向かって逃げるということはありえないことである。この出発の日付に関して盧明輝氏は、1912年の8月[盧明輝 1979:2]、中見氏は9月[Nakami 1999:139]、ジャムサラン氏は9月8日[Л.Жамсран 1996:57]としているが、いずれも根拠を挙げていない。注目されるのはロンジド氏の説である。ロンジド氏はバボージャヴの彰武県出発を1912年8月28日としている[З. Лонжид 2002:3]が、これはアルヒーフ所蔵のバボージャヴ自身の呈文に基づいている点で信憑性が高い。

第二の問題は、彰武県から逃げ出して、「モンゴル独立に参加するために、大庫倫(今のウラーンバートル)に向かった」という記述である。

ジョンジュールジャヴの回想録を用いた盧明輝氏は、バボージャヴのフレー行きを経緯について「1912年の8月部下3, 40名及び家族を連れてある夜中に、スレグ旗より逃げ出して、フ

レーに赴いた、途中「紅胡子」を招いて、匪衆2千人ぐらいを集めて、1913年の春にフレーに到着した。そして、ジェヴツンダンバに鎮国公に封じられた」[盧明輝 1979:2]と述べている。中見氏も盧明輝論文を参照しつつ、バボージャヴが「家族、信奉者らと共に彰武県から逃げ出して、ボグド・ハーン政権に赴いた」[Nakami 1999:139]と直接フレーを目指したものとする。

一方モンゴルの研究者ジャムサラン氏は「…バボージャヴは身の友人らとどうするべきかを相談して、1912年9月8日の夜部下60人連れて故郷より密かに出て、フレーに向かう途中、フレーと意見が一致する内モンゴルのいくつかの地域を經由し、ボグド・ハーン政権に帰順希望している兵士らと合流して、途中一営長になり、中国軍と何回か戦って勝って、フレーに兵士らと到着し、モンゴル官員らに歓迎されて、鎮国公に封じられた」[Л.Жамсран 1996:57]と述べている。氏の叙述においては、出発当初の同行者が60人余に達したこと、フレーに向かう過程で「営長」になったことが新しい知見として加わっている。

これに対して、ロンジド氏は「…1912年8月28日の夜、バボージャヴは親友及び意見が一致するテグスバヤル、テグシバホ（原文には *tassibaγu*、タスショヴォ）ツェンドバル、ボムベジャヴ（原文には、*bumba*、ボムバ）らと一緒に両親、妻子、故郷を捨てて、故郷より出発し、ビント王旗の軍の協理ポンツォグのところに行って、四等台吉ウルジオロシフ、ハラチョー、チョルヴァイ（原文には庶民チョルヴァイ、*qaraču čurbai*）、ハスパートル等30人以上と面会して、ハルハで発生していることに関して相談しているときに、博王旗の権力者（*erketen darqatan*）らがボグド・ハーン政権に帰順しに行ったことを彼に教えた。バボージャヴこの情報を聞いて、前に故郷より一緒に出た友人らの上にビント王旗からも兵士を召募して、同年9月19日にフレーへ出発したが、途中で駐在していた中国軍を警戒して、昼間隠れて夜中に行進して目的地に到着、1912年12月31日にボグド・ハーン政権に呈文を呈上した」[З.Лонжид 2002:3]とし、同志の名前やフレーに至るまでの経緯について、具体的かつ詳細な情報を示している。

これによれば、バボージャヴは彰武県より出発した後、直接フレーに向かったのではなく、ビント王旗に立ち寄った後、「博王旗の権力者」がフレーに帰順したとの情報を聞き、自らもフレーに行ったとしている。ここでは、バボージャヴのフレー行に「博王旗の権力者」なる人物が介在していることが伺われる。ロンジド氏の研究がバボージャヴのフレー行きの経緯についてより詳細な情報を含むのは、氏がアルヒーフ文書しかもバボージャヴ本人がボグド・ハーン政権に呈上した呈文を用いているからである。ただ氏はこの呈文全文のテキストを提示しているわけではなく、一部を利用したに止まる。

ロンジド氏が言及しているバボージャヴのフレー行に介在した「博王旗の権力者」に関連し注目されるのは、陳籙の『止室筆記』が、「アルホア公の一営長としてフレーに行った」と記述している事実である(注5)。もしこれが事実ならば、ロンジド氏が指摘する「権力者」というのが、この「アルホア公」にあたると思えられよう。『止室筆記』は中国、日本の研究者ら

によってすでに用いられてきた史料であるが、バボージャヴがアルホア公の一営長としてフレーに赴いたという点に着目したものはない。

第三の問題は、ジョンジュールジャヴの回想録に「金龍鎮、ナイマン旗、ジャロード旗、アルホルチン旗、東西ウジュムチン旗、アヴガ旗、ホチト旗などを通過し、フレー到着時には2千人の兵を率いていた」とある点である。この回想録の紹介者盧明輝もこれにより、「匪衆2千人ぐらを集めて、1913年の春にフレーに到着した」と述べている。ジャムサラン氏も「フレーに向かう途中、フレーと意見が一致する内モンゴルのいくつかの地域を経由し、ボグド・ハーン政権に帰順を希望している兵士らと合流して、途中一営長になり、中国軍と何回か戦って勝って、フレーに到着した」と、フレーに到着時の兵士の数はあげていないものの、彼が途中各地で軍隊を集め、営長となり、実際に中国軍と戦闘を交えたと理解している。これが事実とすれば、バボージャヴがフレーに至る経緯は、中国軍に追われながらのフレーへの逃亡というジョンジュールジャヴの回想の記述とはだいぶ異なるものとなる。

一方、ロンジド氏は「9月19(新暦)日に首都フレーに向かって出発したが、途中で駐在している中国軍を警戒して、昼間隠れて、夜中に行進して目的地に到着した」[3. Лонжид 2002:3-4]と述べ、フレーに至るまでの経緯に関しては触れていない点も、氏がバボージャヴの呈文を用いていることを考えると不審に思われる。

第四の疑問は、「バボージャヴは、ジェヴツンダンバ・ホトクト及びその大臣らの歓迎と歓待を受け、当時の大庫倫政府から鎮東將軍、鎮国公等の爵位を与えられた」という点である。

ボグド・ハーン政権が1911年12月に樹立されて以来、エグゼルホトクトを通じて、内モンゴル各旗に合流を呼びかけていた。しかし、バボージャヴはその時奉天管轄下にあった彰武県で巡警局長の地位にあり、その合流檄文送付の対象になっていたかどうか疑問である。そのため、いきなりフレーに到着後、歓待をうけて、鎮東將軍、鎮国公に任命されたというのは不可解というしかない。

以上、バボージャヴのフレー行に関する従来の理解からは、次のような疑問が浮かび上がる。第一に、バボージャヴのフレーへ行は、本当にフレーを目指した「逃避行」だったのか、第二に、バボージャヴが数千に及ぶ軍隊を集め、「営長」になることがどうして可能だったのか、第三に彼のフレー行に介在していたらしい権力者とは何者かということである。

次章では、バボージャヴのフレー行に関する日本側の同時代の間接情報を検討したい。それは、当時日本は東部内モンゴルの動静に注目しており、特に以前からかわりがあったバボージャヴに関する情報をも数多く収集していたからである。

3. 日本側の理解

外モンゴルでボグド・ハーン政権が樹立された直後から、内モンゴルの動静は日本に注目さ

れていて、現地人を雇って内モンゴル各地の情報を収集していた。特に、ここで取り上げる新民府というのはジリム盟、彰武県から非常に近いため、この地域の王公らの動向に関する情報をよく把握しており、この日露戦争頃に日本と関係があった彰武県の巡警局長バボージャヴに関する情報も例外ではなかった。

バボージャヴの動向に関する最初と思われる情報は日本駐奉天天野総領事代理より内田外務大臣宛大正元年（1912）10月1日の電報（注6）であった。

北條主任ヨリ左ノ通り

九月三十日彰武縣ヨリ帰來セシ當館雇支那人ノ言ニヨレハ元蒙古馬賊ノ頭目ニテ後同地警防營哨官トナリシハ寶加浦（パバオチャブ）ナルモノ烏泰王ノ蒙古獨立ノ挙ヲ聞キ九月初部下40名ヲ率ヒテ逃走シ多数ノ蒙古兵ヲ集メテ今ヤ同地ニ侵入セントスルノ情報ニ接シ奉天都督ハ九月二十七日巡防兵一營ヲ送リテ應援セシメ既ニ同地ノ北方「シヤリト」ニ進軍シ同地知縣モ亦同方面ニ向ヘリ為メニ人心恟恟タリ

この情報源とされる「北條主任」とは、日本駐奉天日本総領事館新民府分館主任北條太洋である。彰武県は新民府の西北110清里に位置し、新民府の管轄下にあった。新民府には奉天総領事館の分館として新民分館が設置されており、彰武県の出来事は新民府分館が注目していた。この情報が「彰武縣ヨリ帰來セシ當館雇支那人ノ言」であるとされることから、同館が直近の現地機関として情報を入手する位置にあったことが知られる。

この新民府が把握した情報で注目されるのは、彰武県警防營哨官バボージャヴの「逃走」が、ウタイ王の蜂起に加わるためだったとしている点である。中見氏[1979:146]によれば、ウタイ王はジリム盟右翼前旗のジャサグであり、1912年8月20日にジリム右翼後旗のラシミンジュールとともに「東モンゴル独立宣言書」を発して蜂起を起こした。

バボージャヴ研究史に大きな影響を与えたジョンジュールジャヴの回想録には、バボージャヴのフレイ行の目的がウタイ王の蜂起に合流することだったとするような文言はない。バボージャヴの動向に注目していたのは外務省の現地機関だけではなかった。当時四平街駐在の宮内少佐は、1912年11月23日の参謀総長宛電報(注7)において、以下のように報告している。

諸情報ヲ綜合スルニ開魯縣方面ノ蒙古軍ハ「パプチャブ」（人名）ノ率ユル約百五十ノ騎兵ヲ中堅トシ多数ノ人民附和シアルカ如シ「パプチャブ」ハ日露戦當時我井戸川中佐ノ下ニアリ戦後部下百五十ト共ニ彰武縣附近ニ於テ巡警ト為リ居リシカ洮南方面ノ騷擾ニ加ハル目的ニテ部下ヲ率ヒ脱出シ十月五日頃鎮東縣ニ現ハレ支那兵ニ撃退セラレ其後消息不明ナリシ者ナリ博王旗ノアルアルホア公爺之ニ加ハリ在リトノ説アルモ疑ハレ巴林ニ行ケリト云フ寶崑王ハ加ハリ在ルヤモ知レス、要スルニ洮南方面ノ騷擾ニ此レ「パプチャブ」ノ加ハリ居ル丈ケ蒙古軍ノ戦闘力大ナルモノト認ムルモ実力ヲ取ルニ於テハ支那兵ニ鎮壓セラルルナラン、小官ハ二十四日發鄭家屯ニ到ル

アルホア公(アル花公)ハ科尔沁部左翼後旗内ノ輔國公那遜阿爾畢吉呼ナリ

シヤオパエンパタ不明(小巴彥哈達?)

パプチャブ(巴布札布?)

鎮東縣ハ科尔沁右翼後旗即チ蘇鄂公旗内ニ在リ

洮南府ニ属シ日府ノ北方ニ位置ス

上記史料は、バボージャヴが彰武県から洮南の騷擾(ウタイ王の蜂起)に加わろうとして脱出したということでは前の新民府の把握していたバボージャヴの情報と一致する。そして、10月に鎮東県に現れて、中国軍に撃退されて、消息不明になって、その後11月に開魯県の蜂起に加わったという新しい情報を含んでいる。宮内少佐は以上の情報を確かめるために鄭家屯に向かったのであった。

その後、参謀本部は11月28日に宮内少佐が鄭家屯巡警局長張篤福からの聞き取りとして報告してきた情報を、「蒙古情報第27號」(注8)として、12月5日に外務省に報告した。それによれば、

鄭家屯巡警局長ノ談話

小官ハ十一月二十四日四平街發鄭家屯ニ至リ同地巡警局長張篤福ヲ訪問シ開魯縣方面ノ状況及之ニ関スル同人ノ意見ヲ聴取シタリ即チ左ノ如シ

イ、蒙古軍ノ兵力 開魯縣方面ノ蒙古軍ハ初メ四千トノ報アリシモ其後確メ得タル所ニ因レハ一千弱ニシテ重ナル頭目四アリ曰クハト札ト曰ク包金山(洮南事變ニ於ケル蒙古軍頭目ナリ)曰ク「トレミンウルチーダー」外一名ナリ阿爾哈瓦公ハ加ハリアラサルカ如シ賓圖王ノ所在ハ不明ナリ「トレミンウルチーダー」ト余トハ親交アリ彼ハ中々偉ラキ人物ナリ

ロ、開魯縣及小庫倫失守ノ説、開魯縣ハ守ヲ失ヒタルモ其時日ハ二日ト云ヒ五、六日ト云ヒ確實ナラス小庫倫モ占領サレタリトノ説アリ此方面ニ在ル蒙古軍ハハト札トノ率エルモノナルカ如シ

ハ、支那軍ノ行動、洮南ヨリ討伐ノ為メ歩隊二營、馬隊二營出動シタリトノ報アリ鄭家屯ヨリハ兵ヲ出サス馮麟閣ハ八營ヲ率ヒ彰武縣方面ヨリ前進セルモ小庫倫ニ達シタルヤ否ヤ不明ナリ…

上記史料では、情報源が鄭家屯巡警局長張篤福であること、今回の開魯県の蜂起の頭領として参加していたのは4人であり、それはバボージャヴ、トゥメンウルジー、包金山ほか1名であり、アルホア公は関わっていないとしている。そして、ジリム盟左翼後旗のビント王の消息は不明であること、開魯県と小庫倫は陥落し、小庫倫を占領したのがバボージャヴであること、千人位のモンゴル軍を鎮圧するために民国側が軍隊を派遣したことが報告されている。

新民府の北条主任と四平街の宮内少佐の報告を比較すると、バボージャヴは洮南の蜂起(ウ

タイ王の蜂起)に加わるために彰武県から出発したという点で一致している。そして、宮内少佐の情報では10月初め頃にバボージャヴは鎮東県に現れて、その後消息がわからなくなったが、11月の開魯県の蜂起には一頭領として加わっていたというのである。またアルホア公は今回の開魯県の蜂起に加わっていないとされる。

以上の報告を見て注目されるのは、開魯県の蜂起に関わって、バボージャヴの動向とともに、アルホア公なる人物の動静に関心が向けられている事実である。開魯県での蜂起について、在旅順紫少将の次長宛電報(注9)のうち1912年11月23日午前9時発の第二二三九號電報も、次のように述べている。

二十二日賓州王府ヨリ奉天ニ帰着シタル密偵ノ報告、札賚特旗内ノ蒙古独立軍ハ博王旗下アルホア公及ヒ、シヤオバアエンパタトウヲ首領トシ兵数二千、十一月十五日開魯、林西二縣ヲ占領シ勢ヒ猖獗奉天省ヨリ二十八師團歩隊、馬隊、四營小庫倫ヲ経テ開魯縣ニ向ヒタリト

ビント王府から奉天に戻ってきた密偵の報告として開魯県の蜂起には博王旗のアルホア公及び「シヤオバアエンパタトウ」を頭領とした2千人の兵士らが加わっているというのである。ここで「札賚特」とあるのは「扎魯特」の誤りであろう。

一方、日本外務省側の在奉天落合総領事の1912年11月23日午前12時発内田外務大臣宛の第449号電報(注10)によれば、

…十一月二十二日信頼スヘキ情報ナリトテ守田大佐ヨリ通報シ来レル所ニ依レハ今回熱河方面ニ起リタル蒙人ノ南下ハ曩ニ洮南方面ニ起レルモノト其ノ軌ヲ一ニシテ今回南下ノ蒙人ハ武装セラレタル二千餘名ノ兵力ヲ有シ居リ曩ニ庫倫陸軍大臣ニ擬セラレタル博王ノ旗下ナル爾哈巴公及陶什陶ノ義兄弟小白彦哈達等之ヲ引率シ十一月十五日開魯林西ノ二縣ヲ陥レ勢ヒ猖獗ヲ極ム姜桂題ハ部下ヲ提ケテ通朔ヨリ乗車山海関錦州間ニ下車十一月十七日十八日十九日ノ三日間ニ朝陽縣方面ニ向ヒタルモノ…

と、守田大佐の情報を信頼すべき情報として、外務省に報告している。その情報では開魯県の蜂起には、ボグド・ハーン政権の軍務大臣爾哈巴公(アルホア公)と陶什陶(トクトフ)の義兄弟が参加していたという。この情報源とされる守田大佐とは、在四平街陸軍歩兵大佐守田利遠である。守田は、アルホア公の動静に関してそのプレー行きの時から把握していた。それは、1912年の4月16日付守田大佐から奉天総領事宛(注11)の報告にも伺われる。

博王旗下ノアヽリホァ公ハ四月二日庫倫ニ向テ出発セリ情况ヲ視察シ兼テ内外蒙古ノ連絡ヲ謀ルニアリト

これによるとアルホア公は1912年4月2日にプレーに向かい、その目的は内外モンゴルの連絡をはかるためであったとされる。そして、さらにアルホア公のこの後の行方に関し、大正元年9月16日付在奉天総領事代理領事天野恭太郎より外務大臣子爵内田康哉宛の文書(注12)は以

下のように報告している。

…博王旗閑散鎮國公タルアルハ瓦公ハ庫倫ヨリ反旗後直チニ内蒙古ノ獨立ヲ提唱シ兵丁ノ募集ニ着手セントセシモ富勒渾等有力派ノ反抗ニ遇ヒ其意ヲ果サスシテ今日ニ及ヒシニ此次洮南方面ニ於ケル蒙古人ノ獨立運動起リ其勢日々強大ニ赴キツツアルヲ見遂ニ家族及旗下ノ兵丁若干（約五百トモ云ヒ或ハ二百或ハ百トモ云フ）ヲ率ヒテ全地ヲ發シ北方ニ向ヘリト

以上の情報源は、「在四平街守田大佐ノ後任者日下少佐」であり、これによれば、アルホア公はフレーより戻ってきて博王旗で徴兵した兵士ら及び家族を連れて、洮南方面の蜂起に加わるため博王旗より出発して北に向かったこと、徴募した兵士の正確な数は不明だが、この情報が出された9月16日にアルホア公は博王旗にすでにいないことが報告されている。

当時、日本駐奉天領事館からは鄭家屯及び洮南府に通信員を設置していて、東部内モンゴルにおける王公らの動静に関する情報を収集していた。その情報員設置については、11月23日付の在奉天落合総領事より内田外務大臣宛の電報(注13)に、

鄭家屯及洮南府ニ特別通信員設置ノ件ハ豫テ守田大佐ニ人選方ヲ依頼シ置キ其後モ数回考究打合ヲ遂ゲタル所鄭家屯丈取調べ通信任務ヲ引受ケル相當ノ人ヲ置キ、本官ノ直属トシテ情報ヲ送ラシムルコトヲ目的トシテ…

と見え、奉天領事館の鄭家屯及び洮南府に設置された通信員は守田の推薦により設置されたものである。

以上の新民府、四平街の報告をまとめると、彰武県の巡警局長バボージャヴはウタイ王の獨立に加わるために、9月はじめに彰武県から逃走し、10月5日頃に鎮東県に現れ、その後一頭領として11月のジョーオダ盟開魯県の蜂起に参加していたこと、ジリム盟博王旗のアルホア公は4月頃にフレーに行き、その後兵を徴募しに故郷に戻ってきて、9月中旬頃に徴募した兵士らとともに故郷より北へ出発して、11月の開魯県の蜂起に一頭領として参加していたことが知られる。

一方、日本外務省より大正元年12月11日に欧米各国に駐在している大使に送られた「開魯縣地方騷擾状況ニ関スル件」(注14)には

本年十月末直隸省管下開魯縣（内蒙古照烏達盟札魯特旗ノ南端ニシテ達頼罕王府ノ西ニ在リ即昌図府下鄭家屯ノ西方ニ当ル）附近ニ北方ヨリ約二千ノ蒙古軍來撃シ支那人ヲ虐殺シ知縣ヲ逐ヒ十一月中旬開魯縣林西縣（開魯縣ノ西北巴林部内ニ在リ）ヲ陥レ次テ赤峯地方ヲ擾カシ勢益々猖獗ニシテ今ヤ朝陽（内蒙古卓索圖盟土默特部ニ在リ）熱河兩地方方面ニ向テ南下ヲ企テツツアリ右蒙古勢ハ曩ニ洮南府附近ニ於テ反乱ヲ企テタル元札薩克圖郡王烏泰ノ殘党ニ土匪ノ加担シタル混合軍ナルモノ如ク庫倫活佛政府ノ陸軍大臣ニ擬セラレタル博王旗内ノアル花（アルホア）公及庫倫政府ノ陸軍總司令

■（原文文字不明）陶什陶ノ義兄弟ナル小巴彦哈達（シヤヲパエンバタ）並日露戦後当時我軍ニ於テ使用シタルコトアル巴布札布（パプチャブ）（同人ハ戦後部下百余名ト共ニ彰武縣（哲里木盟科尔沁部賓図郡王旗内ニ在リ）附近ニ在リ同地方ニ於テ巡警トナリ居タルカ曩ニ部下ヲ率ヒテ脱走シ十月初旬突然鎮東縣（哲里木盟科尔沁右翼後旗即チ蘇鄂公旗内ニ在リ洮南府下ニ属シ同府ノ北方ニ位置ス）ニ現ハレ支那兵ニ撃退セラレシコトアリ）等之ヲ引率スルモノノ如シ頭目中ニ包金山（洮南府附近反乱ノ際蒙古軍ノ頭目タリシ者）アリトモ云フ…

とみえる。すなわち日本外務省が現地の各情報をまとめた結果として、開魯県の蜂起に参加した頭領は、ボグド・ハーン政権軍務省大臣アルホア公、ボグド・ハーン政権の軍務総司令クトフの義兄弟「シヤヲパエンバタ」、日露戦争の時に日本側に協力していたバボージャヴ、洮南の反乱のモンゴル軍の頭目包金山であり、「元札薩克図郡王烏泰ノ残党ニ土匪ノ加担シタル混合軍」としている。

以上の日本のバボージャヴに関する情報からは、従来のバボージャヴのフレー行の史料として使われてきたジョンジュールジャヴの回想に記されたフレー行の目的とは、異なる理解が浮上する。

ジョンジュールジャヴが「バボージャヴは3、40名の部下及び妻子、子供を連れ、大冷営子より逃げ出して、モンゴル独立に参加するために、大庫倫に向かった」と直接フレーの独立に加わろうとするのに対して、日本側の情報は「烏泰王ノ蒙古独立ノ挙ヲ聞キ九月初部下40名ヲ率ヒテ逃走シ」として、直接フレーに向かったのではなく、ウタイ王のモンゴル独立運動に加わるため、彰武県から逃走したとしている。

ジョンジュールジャヴはフレーに向かう途中経由した場所について、「金龍鎮、ナイマン旗、ジャロード旗、アルホルチン旗、東西ウジュムチン旗、アヴガ旗、ホチト旗などを通過し、家族をホチト旗に留めて、バボージャヴは軍隊をつれて、大庫倫に赴いた」とするのに対し、日本側の情報では「十月初旬突然鎮東縣ニ現ハレ支那兵ニ撃退セラレシ」その後に開魯県の蜂起を起こしたとする。

また日本外務省側の情報では、開魯県の蜂起の時にバボージャヴはアルホア公とともにいたと理解している。そして最大の相違点は、ジョンジュールジャヴの回想が、バボージャヴが直接フレーに行ったとするのに対し、日本側の情報の中にはかかる理解は見当たらないという点である。

日本側が得ていた情報は、バボージャヴはフレーに向かって逃走したのではなく、ウタイ王の独立に加わるために鎮東県に現れ、撃退された後、開魯の蜂起にアルホア公とともに一頭領として参加していたというものであり、彰武県からフレーに直接逃げ込んだものとはしていない点を確認している。

次章では、モンゴル国立中央アルヒーフに所蔵されているバボージャヴ本人からボグド・ハーン政権に呈上した呈文を用いて彼のフレエ行の経緯を検討したい。

4. 本人の呈文

本章では、モンゴル国立中央アルヒーフ所蔵の文書を用いて、バボージャヴのフレエ行の経緯を検討したい。ここで用いるのは、バボージャヴ自身がボグド・ハーン政府に提出した呈文、アルホア公ナスンアルビジフの徴募した官兵への恩賜要請を含む内務省文書、バボージャヴとジトグルトがアルホア公ナスンアルビジフからの自立の許可を求めたことに関する総務省文書、及びアルホア公ナスンアルビジフによる部下ムルンガ、ガダガルの自立許可要請の呈文である。

4-1. バボージャヴの呈文に見えるフレエ行の経緯

まず、バボージャヴ自身の呈文は、モンゴル国立中央アルヒーフの総務省フォンドに1912年の「本国に帰順した人達及びそれに関する奏摺」（計27件）（*tus ulus-tu dayayyar-a oruysan kümüs-ba tere tuqai qolbuydaqu nuylburi biçig-üd*）として登録されている27件の文書の第5件目として分類されているもので、黒墨で縦37行にわたって記された摺子（*nuylburi*）である。文書作成者は「ジョソト盟盟長王、トゥメド左翼旗箭丁、メイレン・バボージャヴ」とあり、宛先は「総務省」、共戴2年11月23日（新暦1912年12月31日）の日付がある。この文書はボグド・ハーン政権に帰順するまでの経過がバボージャヴ本人の手によって記されている点で重要である。前述のように本文書はロンジド氏によって一部が利用されているが、同氏はこれをバボージャヴがボグド・ハーン政府に帰順を表明した文書であるとしている。[3.Лонжид 2002:3]

まずバボージャヴは、文書冒頭で、

ジョソト盟盟長王トゥメド左翼旗の箭丁メイレン・バボージャヴが謹んで総務省に文書を呈して報告する件。卑小な私は自旗より出てきて旧スレグの新しい政府彰武県の地方を何年間か警備する職に就いていたが、

と記し、自分がジョソト盟トゥメド左翼旗の属民であることを明らかにし、その上で帰順の経緯を次のように述べている。

我々の前清の政権を、狡猾な民人の官吏が党派を結成し、自ら国を樹立し、モンゴルに危機が起きた際、同年春に聞いたところによれば、政教に軌をとともに持する我がボグド・ハーンが、モンゴル人に慈悲を垂れて、水火の苦難より救い出そうと、玉座に即き、北方世界と命名し国家を樹立したため、私バボージャヴは、副長テグスバヤル、タスジョヴォ、チンドバラ、ブムバ達及び諸兵士達と共に相談し、それぞれ家族をすべて捨てて、本年7月16日（8月28日）の夜計60名程が家を出発して、ビント王旗の軍務協理ボンツォグの家にて、召集した四等台吉ウルジオルシフ、庶民チョルヴァ

イ、ハスバートル等30名余と合流していたところ…

これによると、バボージャヴは彰武県から直接フレーに赴いたのではなく、60余名の部下を連れ彰武県からピント王旗の協理ボンツォグのもとに行ったとしている。しかも、ピント王旗で30余名の兵士と合流して、既に90余名の兵士を擁していた。

さらに呈文には、

ボドルガタイ親王旗のアルホア貝子がボグド・ハーンの教化に従い、勅命によって兵士を徴集し、首都フレーに赴くと聞き、本年8月初9日（新暦9月19日）に故郷より出発したので、ピント親王旗で面会し、ともに来た。途中以前官兵を指揮していたことや忠誠を考えて一営の長に任命されたが、私の本心はボグド・ハーンのために犬馬の労を尽くして、国民の一員としてささやかなりとも応えて、身を犠牲にしても恨むところはない。衷心から人として生まれた目的を達成するために来たことを呈し申し上げる、慈悲により貴省よりご照覧し、ご指示を乞う。

このため申し上げます。

共戴2年冬中月23日(注15) (1912年12月31日)

と書かれている。

まず、ここで注目されるのは、バボージャヴが、ボグド・ハーン政権の命令で徴兵を行っていたアルホア公に召募され、営長に任命されたことによってはじめてフレーに向かったことが述べられている点である。

彼が営長に任命されたことについては、前述のように、ジャムサラン氏が、フレーに赴く「途中一営長に」なったと述べているが、どこの誰の営長になったのかは明示していない。ロンジド氏は、「博王旗の権力者」としているが、名前を挙げていない。このバボージャヴ本人の呈文からは、「博王旗の権力者」というのがボドルガタイ親王旗のアルホア公であって、しかもアルホア公に召募されて、フレーに向かう途中、営長に任命されたことが知られる。この事実は、アルホア公が彰武県の巡警局長であったバボージャヴとボグド・ハーン政権を結びつける役割を果たしたことを示している。

ところで、この呈文は11月23日（1912年12月31日）にボグド・ハーン政権に呈上されており、バボージャヴが自分の所属旗や彰武県で巡警局長だったことを自己紹介していることから、おそらく彼がボグド・ハーン政権に呈上した初めての文書であり、しかも、この時点では、彼自身が既にフレーにいたものと考えられる。一方すでに見たように、日本側が把握していた情報では、バボージャヴは新暦の9月初めに彰武県から洮南方面のウタイ王の蜂起に加わるために逃走して、10月初め頃に鎮東県に現れ、11月の開魯の蜂起に一頭領として参加していたとされている。呈文には、彰武県から出発したのが、ウタイ王の蜂起に加わるためではなく、ピント王旗を目指して、そこでアルホア公に会って、フレーに来たと述べていて、開魯の蜂起に関し

ては、言及がない。

もし日本側の情報に見えるように、バボージャヴがアルホア公とともに、一頭領として内モンゴル開魯県での蜂起を起こしたとすれば、彼らは蜂起の失敗後にフレーに赴いたはずである。日本側の情報によると開魯県の陥落は新暦11月15日とされているが、バボージャヴの呈文は新暦12月31日付であることから、彼が内モンゴルでの蜂起失敗後にフレーに向かったとしても矛盾はない。またこの呈文によれば、バボージャヴは9月には既にアルホア公と合流しているから、アルホア公の動向がわかれば、バボージャヴの動向も解明できるだろう。

4-2. アルホア公の呈文に見えるフレーに到着時のバボージャヴ

そこで次に、共戴2年冬中月22日(新暦1912年12月30日)付のボグド・ハーン政権の内務省より総務省に送られた文書を取り上げたい。この文書は、アルホア公ナスナルビジフが南方より招募してきた兵士らへの恩賜を請願したことを伝達した文書(注16)である。これによれば、今年冬中月初8日(新暦1912年12月16日)内務省より附件を付けて上奏した件

今年の夏初月軍務省副大臣ビシレルト貝子ナスナルビジフが命令に従って、南方辺境を安定させるため一千の兵士を招募して首都フレーに来させよという命令に謹んで従って、該大臣貝子ナスナルビジフ本人を南方へ駅舎により出発させた。現在大臣貝子ナスナルビジフ本人の招募してきた1千の兵士の内、先に兵士300名が特に官員に管轄されてともに首都フレーにすでに到着した。このため、弟子たる奴才らが伏して思うに、大臣貝子ナスナルビジフが上諭に従い、南方より招募した1千名の兵士らより300名余を選んで、家族をつれて、首都フレーに来て、国家を守るために安置したことは、国の政治に誠を尽くし、家と土地を捨ててきたこと故郷からやってきたことは、二心無きことを示し尽くしたものであるといてよい。また、彼が召集してきた官兵が遠方よりボグド・ハーンの諭旨と慈悲を信奉し、文化に帰化し、おおいなる国政に力を尽くそうと自ら進んで来たことは真に賞賛すべきことである。よろしく伝達上奏し、兵士達を指揮する属下の大臣貝子ナスナルビジフをはじめとする官員達に恩を施し、賞賛して尽くそうとする心をさらに一層深くさせるべきであるが、弟子たる奴才らのほしいままに処理する事ではないので、謹んで附件を書き、彼ら官員の名簿とともに進呈上奏し、ボグド・ハーンの照覧を賜りたい。これゆえに謹んで上奏した。

とあり、冬中月初8日(新暦1912年12月16日)にアルホア公ナスナルビジフ及び彼に招募されてきた300余名の兵士らがフレーに既に来ており、これらの官兵に賞与するようにボグド・ハーンに請願している。この請願は、

上奏したところ、同月の初9日受領した同附件に記された朱批に、ナスナルビジフは誠に尽くすためにやってきた兵士らを召集してきたのが、誠に賞賛すべきであるの

で、世襲固山貝子品級を賞与せよ。他の官員らに賞与する恩賜を別に附件に記し、謹んで従ってこれを軍務省副大臣ビシレルト貝子ナスナルビジフに命じ送って、上奏した件、下された諭旨に謹んで従って送付しよう…

共戴二年 冬中月22日 (1912年12月30日)

とあり、11月8日(新暦1912年12月16日)に上奏が行われ、翌9日に朱批が下され、これを同月22日(新暦12月30日)に総務省など五省とナスナルビジフに伝達したものであることがわかる。ここから、バボージャヴは、ナスナルビジフとともに11月8日(新暦12月16日)以前にフレーに到着していることが知られる。この文書には以下のような召募した兵士の名簿が添付されている。

名单

南方より召集してきた兵士

総官四等台吉 ボヤンアルビジフに頭等頂子花翎

印務 メイレン・トゥヴツォグトに二等頂子花翎

筆頭筆帖式三等待衛テグスバヤル、ボムバラに二等頂子花翎

南方営長メイレン・バボージャヴに二等頂子花翎

東方営長ジャラン・ムルンガに二等頂子花翎

西方営長メイレン・ジトグルトに二等頂子花翎

北方営長メイレン・ガダガルに二等頂子花翎

五十名兵士班長 花翎三等台吉ジャトに二等頂子

同副等待衛 バトビリグトに三等頂子花翎

同五等 オラガル、シャラ、マンドフ、ジャルンガ、ダルチ、チョルヴァイらに五等頂子

五十名班長協理四等台吉 ウルジオロシフ、ジャムソ、ダムリンジャヴ、ダムツォグ、タイシ、ヒュシュンカらに六等頂子

六等 エルデニアグラ、ハスバートルに五等頂子

軍糧を管理する官吏メイレン・ヒュシュンカ、ユウラン、軍の総巡察 四等台吉 ライバ、五等チンドバラ、ボムバ、ポンツォグ

ここには、たしかに南方営長としてバボージャヴの名が見える。このようにバボージャヴは9月中旬にアルホア公と合流し、12月16日までにフレーに到着したことが判明する。その9月から12月までの3ヵ月間に、日本側情報が伝えるように、開魯県の蜂起に一頭領として参加していたことは十分にありえるだろう。

また、従来の研究では、ジョンジュールジャヴの回想録に基づき、バボージャヴがフレーに赴いて、途中2000余名の兵士を集めて、フレーに到着した後、ボグド・ハーン政権に鎮国公に

封じられたという。しかし、この文書及び前掲のバボージャヴ本人の呈文によれば、彼が彰武県からビント王旗を目指した時に率いていた兵は60余名であり、ビント王旗で30余名を加えた結果90余名となったとされている。またアルホア公が率いていたバボージャヴを南方営長とする四営の兵は300余名であり、たとえ文書にあるように1千名の兵を集めたとしても、従来のジョンジュールジャヴの回想録にあるようにバボージャヴだけで2000余名の軍隊を連れてフレーに到着したということは考えにくい。

また、バボージャヴがフレーに到着してすぐ鎮国公に封じられたという問題に関しては、ジャムサラン氏は、「…バボージャヴが軍隊を率いてフレーに到着したときにボグド・ハーンと他の権力者らは彼に感謝して、歓迎して、鎮国公に封じた」[Л.Жамсран 1996:57]とし、バボージャヴが1912年11月のフレー到着後、鎮国公に封じられたとしている。ただ氏は根拠を示していない。

これに対してロンジド氏は、バボージャヴがボグド・ハーン政権に尽くすことを願い出た前掲の呈文を示すのみで、バボージャヴがフレーに到着した時点で直ちに鎮国公に封じられたとは述べていない。

上掲のアルホア公ナスンアルビジフによる召募官兵らの賞与請願文書に附された官兵の名簿では、アルホア公ナスンアルビジフに世襲固山貝子品級を賞与し、南方辺営長メイレン・バボージャヴには二等頂子・花翎が授与されているのみで、彼が世襲鎮国公に封じられたとは記されていない。これらの文書から、1912年12月にアルホア公の営長としてフレーに行ったバボージャヴが、その時点で鎮国公に封じられていないことは明らかであろう。

ところでジャムサラン氏は、フレーにおけるバボージャヴの動向について、「モンゴル国が彼の努力をこのように評価したことに、メイレン・バボージャヴは非常に感激し、1912年11月にボグド・ハーン政権の総務省に…「ただちに我々の兵士達をわれら二人（もう一人の営長メイレン・ジトグルト）にとくに指揮させて、敵に対して出陣させ、力を尽くし忠誠心を遂げさせられますよう」と呈出した…」[Л.Жамсран 1996:57]（注17）と述べている。これはアルホア公の一営長としてフレーに来たバボージャヴが、アルホア公からの自立を図ったものである。しかし、ジャムサラン氏はこの請願の経緯についてこれ以上の検討を加えていない。

4-3. バボージャヴの自立

そこで次に、ジャムサラン氏が引用した文書、すなわち共戴2年11月30日（新暦1913年1月7日）付の「メイレン・ジトグルト、バボージャヴ達それぞれの本心はボグド・ハーンのために犬馬の労を尽くすように決心したこと、また兵士達と共に敵に向かって出陣しようとそれぞれ呈出したことを書き写し、本請願どおりに行わせしめるよう論旨を請い上奏する摺子の稿」の題記のある輔弼大臣セツェン・ハン・ナ（ナワーンネレン）、御前大臣・総理大臣サインノヤン（ナムナンスレン）、副大臣ビント親王ゴ（ゴンチグスレン）の奏文（注18）を用いて、

この問題を検討したい。この文書はモンゴル国立中央アルヒーフの総務省フォンドの1912年「本省が送った上奏文及び他省から送られてきた奏摺等を記録した档冊」(tus yamun-ača γarγaysan ayiladqal-ud-un eke busud yamun γajar-ud-tu yaburyuluγsan ba iregsen bičig-ün temdegleltü dangsa) という題目がつけられた档冊に収録されているものである。档冊は全185ページ、縦27.5cm、横26cm、厚さ2.5cmであって、本文書は23頁から33頁までに収録されている。この上奏文によれば

上奏すること、ジリム盟副大臣ビント親王ゴ、ジョソト盟トゥメド左翼旗王等のメイレン・ジトグルト、バボージャヴらそれぞれ管轄下の兵士を率いて、政府に力を尽くすと次々に呈文を呈出したことを謹んで摺子を書き、上奏して、ボグド・エジェンのご照覧を請う件。現在、ジリム盟のジトグルト、また、ジョソト盟長トゥメド左翼王旗のメイレン・バボージャヴよりの呈文に…

として、バボージャヴ本人の呈文(上述したバボージャヴ本人の呈文)とジトグルトの呈文、及び別に提出された兩人連名の文書を引いている。その内、兩人連名の文書に、

ボグド・ハーンの明瞭なる論旨が下されたのに喜んで従い、管轄下の兵士達を教え導いて、律して従わせる外、卑小な我等二人の管轄下の兵士の数は併せて二百名近く、もともと遠方から首都フレーに来て、ボグド・ハーンの盛んなる文化に帰化し、ささやかなりとも力を尽くそうとしたのみで、錢糧の優遇を受けて安楽に生活したかったわけではない。ただ一つ請うらくは、貴省より卑小なる私の忠誠な心をお認めになり、我々の兵士達を二人にとくに指揮させて、敵の方に出陣させ、いかに力を尽くさせ、忠誠な心を実現させられたいと呈した、

と見え、バボージャヴらがフレーに来た目的を表明し、自らの管轄下の兵士を独自に指揮させるように請願していたことが知られる。つまりバボージャヴはアルホア公の南方営長としてフレーに来たものの、それに満足せずにアルホア公の管下より自立しようと図っていたことが知られるのである。これに対してナワーンネレン等は、

ここで奴才共に伏して思うに、メイレン・ジトグルト、バボージャヴらはこのようにそれぞれの管轄下の兵士達を自ら指揮し政権に力を尽くさんとしており、また、全兵士達に論旨により与えるよう定められた錢糧をそのとおりに授けようというのは、真に理にかなっており、また管轄下の兵士達を諸事に従わせ指揮できるようであるので、ただちに請うたとおりに行わせてもよいが、弟子たる奴才達がほしいままに処理することではないため、原呈文をそのまま書き写し謹んで摺子を書き、上奏し、請うらくは、ボグド・ハーンがご照覧になり、教え諭されたい。これゆえに謹んで上奏した。論旨を請う。

共戴二年十一月三十(1913年1月7日)

との判断を下し上奏した。それではバボージャヴは結局アルホア公より自立できたのであろうか。共載2年冬末月15日(新暦1913年1月22日)、アルホア公ナスンアルビジフが総務省に「我が徴募してきた軍の長バボージャヴらは自分の管轄下の兵士らを分離させて管轄しようと言うのを、その通り認めた」との文書(注19)を呈しており、バボージャヴがアルホア公の管轄下の一営長から自立できたことが伺われる。

その後、バボージャヴは自分の部下とともに1913年のボグド・ハーン政権が内モンゴルに五方面軍を派遣したとき、東南方面軍の指揮官として派遣されたのである。内モンゴルに戻ってきたバボージャヴは現地で徴募を行い、1915年の時点では既に2000名以上の兵士を擁するようになっており、その兵士らの殆どが東部内モンゴル人であった。ボグド・ハーン政権は彼を「東南辺境モンゴル人鎮撫官兵総管大臣ショドルゴ・バートル世襲鎮国公」に任命した。

ボグド・ハーン政権は中露宣言によって、1913年末に内モンゴルから軍を引き揚げざる得なくなったが、バボージャヴは内外モンゴルの境界地方にとどまった。このバボージャヴ軍は、辺境に度々騒擾を引き起こしていると、当時、ボグド・ハーン政権と中華民国の間で問題になっていた。実際、この頃のバボージャヴはボグド・ハーン政権の東南辺境において大きな権力と2000名以上の兵士らを有していた。この兵隊は、ボグド・ハーン政権にとっても膨大な数であった。この頃バボージャヴが握っていた権力及び軍隊の構成については次の課題としたい。

まとめ

本稿では、近代モンゴル独立運動史上、古くから日本、中国、モンゴルで注目されてきた東部内モンゴル・ジョソト盟トゥメド左翼旗出身のバボージャヴの活動を日本外交文書及びモンゴル国立中央アルヒーフ文書を用いて、これまで注目されてこなかったフレー行の経緯を明らかにすることを試みた。

従来、バボージャヴのフレー行に関しては、外モンゴルの独立を聞いて、それに加わるために彰武県からフレーに逃走したとされている。しかし、彼はジョソト盟の旗民であるが、盟旗の行政組織ではない奉天管轄下の彰武県の巡警局長であり、諸盟旗ジャサグ宛の合流の檄文がバボージャヴには届けられていたとは考えにくく、またそのようなバボージャヴが自らフレーに赴いたことにより直ちに「歓迎と歓待」を受け、鎮国公に封じられたという従来の理解は受け入れがたい。

このような疑問を出発点としてバボージャヴのフレー行の経緯を検討した結果、彼はフレーにおける独立運動に呼応して直接フレーに赴いたのではなく、まず、ビント王旗に立ち寄って、そこで、ボグド・ハーン政権の命令により内モンゴルで兵を徴募していた博王旗のアルホア公ナスンアルビジフに召募され、アルホア公率いる軍の南方方面営長となって開魯での蜂起に参加し、1912年12月中旬頃にフレーに到着したということが明らかとなった。

ボグド・ハーン政権とバボージャヴの間の接点となったのはこのアルホア公ナスンアルビジフだったのである。彼は、内モンゴル・ジリム盟三旗の王公を代表してボグド・ハーン政権に帰順書を届けた人物であったことが、橘氏（橘誠2007:160）により明らかにされている。バボージャヴはアルホア公ナスンアルビジフの一宮長となることによって、はじめてフレーのボグド・ハーン政権に認められ、その後自立してボグド・ハーン政権の指揮官になって内モンゴルに戻ってきたのであった。

注

- (1) 『モンゴル国新史』は1925－1927年間にマグサルジャヴが作成した。1994年にバトサイハン氏、ロンジド氏がキリル文字で刊行したものを利用した。この内モンゴルの合流問題に関しては近年ジュルゲン・タイブン（2001）、橘誠（2005）、汪炳明（1996）らが研究論文を発表している。
- (2) バボージャヴの活動について、[白拉都格其、金海、賽航 2002]、[波多野勝2001]、[王希亮1993]、[Ц.Пунцагноров 1955][Монгол улсын шинэ түүх、2003]等。
- (3) ボグド・ハーン政府時代に関わるものとして、『モンゴル上下院史料集』“Монгол улсын дээд доод хурал、Баримт бичгийн эмхэтгэл（1914－1916）”УБ、2003三冊、『20世紀モンゴル史料1911－1921』“Хорьдугаар зууны монголын түүхийн эх сурвалж（1911-1921）”УБ 2003、等を挙げるができる。
- (4) 「アジア歴史資料センター」は2001年に開設された <http://www.jacar.go.jp/> ホームページで外務省外交史料館、国立公文書館及び防衛省防衛研究所図書館が所蔵する文書が公開されている。
- (5) 陳籙『止室筆記』近代中國史料叢刊第十七輯文海出版社1968、72頁。
- (6) 外務省外交史料館。一門政治/6類「諸外国内政」蒙古情報第二卷 大正元年9月26日から大正元年10月9日 0006。
- (7) 外務省外交史料館。一門政治/6類「諸外国内政」蒙古情報第二卷明治45年1月10日から大正1年12月3日 0201-0202。
- (8) 外務省外交史料館。一門政治/6類「諸外国内政」蒙古情報第二卷 大正元年11月29日から大正元年12月19日 0240。
- (9) 外務省外交史料館。一門政治/6類「諸外国内政」蒙古情報第二卷 明治45年1月10日から大正元年12月3日 0200。
- (10) 外務省外交史料館。一門政治/6類「諸外国内政」蒙古情報第二卷 明治45年1月10日から大正元年12月3日 0198－0199。
- (11) 外務省外交史料館。一門政治/6類「諸外国内政」蒙古第一卷 明治44年9月28日から明治45年4月18日、件名「蒙古王及喇嘛ノ行動」0094－0095。
- (12) 外務省外交史料館。一門政治/6類「諸外国内政」蒙古情報第一卷 大正元年9月1日から大正元年9月23日 0409。
- (13) 外務省外交史料館。一門政治/6類「諸外国内政」蒙古情報第二卷 明治45年1月10日から大正1年12月3日 0203。
- (14) 外務省外交史料館。一門政治/6類「諸外国内政」蒙古情報第二卷 大正元年11月29日から大正元年12月19日 0246－0248。

- (15) МУУТА, ФА-2Д-1ХН-80Б-5.
(16) МУУТА, ФА-2Д-1ХН-81Б-29.
(17) ジャムサラン氏が『モンゴル辛亥革命』で引用した МУУТА Ф-1 ХН-72 文書はアルヒーフが新しく史料番号を修正したため、ジャムサラン氏が提示した番号では見つからなかったが、氏が引用した文書の一部分の内容が注15の文書と一致するので、注15の文書は氏が引用された文書だと考えられる、ここでは注15の文書を参考にした。以下はジャムサラン氏が引用した原文のモンゴル語転写である。(daruyiqan-a man-u čirig-üd-i biden-ü qoyar kümün-iyer joriγuda jakirayulun dayisun-u жүг mordaγulqu ba yaγakin küčün jidküljü ilerün sidurγu sedkil-i kürügülkü ajiyamu)
(18) МУУТА, ФА-2Д-1ХН-3.
(19) МУУТА, ФА-2Д-1ХН-82 Б-2.

参考文献

〔日本語〕

王希亮 1993

「満蒙独立運動と大陸浪人」『金沢法学』35 (1, 2)、115-139頁。

柏原孝久、濱田純一 1919

『蒙古地誌』上巻。

黒龍會 1966

『東亜先覺志士紀傳』、中、原書房。

ジュリゲン・タイブン 2001

「1911年のボグド・ハーン政権に帰順した内モンゴル旗数の再検討」『モンゴル研究』19、21-30頁。

橘誠 2005

「ボグド＝ハーン政権の内モンゴル統合の試み—シリーンゴル盟を事例として—」『東洋学報』87 (3)、63-94頁。

橘誠 2007

「20世紀初頭の内モンゴル東部地域の社会構造—ジリム盟ゴルロス後旗の事例から—」アジア地域文化学叢書8『近現代内モンゴル東部の変容』雄山閣、157-183頁。

中見立夫 1976

「ハイサンとオタイーボグド・ハーン政権下における南モンゴル人」『東洋学報』57 (1, 2)、125-170頁。

波多野勝 2001

『満蒙独立運動』PHP 新書。

ボルジギン・ブレンサイン 2007

「ハラチン・トメド移民と近現代モンゴル社会」アジア地域文化学叢書8『近現代内モンゴル東部の変容』雄山閣、318-345頁。

〔中国語〕

白拉都格其、金海、賽航 2002

『蒙古民族通史』第五卷(上)、275-283頁。

陳籙 1968

『止室筆記』近代中國史料叢刊第十七輯、文海出版社。

盧明輝 1979

『巴布扎布史料選編』中国蒙古史学会。

汪炳明 1996

「關於民国初年表示外蒙古哲布尊丹巴政府的内蒙古盟旗王公」『蒙古学信息』1、36-38頁。

正珠爾扎布（ジョンジュールジャヴ） 1984

「巴布扎布事略」『内蒙古文史資料』14、184-188頁、中国人民政治協商会議内蒙古自治
区委員会文史資料研究委員会。

〔欧文〕

Nakami, Tatsuo 1999

“Babuḡab and His Uprising: Re-examining the Inner Mongol Struggle for Independence”, The
Memoirs of the Toyo Bunko.57, pp.137-153.

〔モンゴル語〕

Жамсран, Л. 1996

“Монголын цагаагчин гахай жилийн хувьсгал”, Улаанбаатар.

Лонжид, З. 2002

“Шудрага баатар Бабуужаб”, Улаанбаатар.

Магсаржав, Х. 1925-1927

“Монгол улсын шинэ түүх”, Улаанбаатар.

“Монгол улсын түүх”, Улаанбаатар. 56оть. 2003.

Пунцагноров, Ц. 1955

“Монголын автономит үеийн түүх”, Улаанбаатар.